

令和元年度弘前市総合教育会議 会議録

日時 令和元年12月20日(金)
午後3時40分から5時まで
場所 岩木庁舎2階「会議室3」

◇議事日程

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議事
・確認事項 「弘前市総合計画」における分野別政策「①学び」について
- 4 閉会

◇出席者

弘前市長 櫻田 宏、教育長 吉田 健、教育長職務代理者 日景 弥生、
教育委員 澤田 美彦、教育委員 高木 恵美子、教育委員 村谷 要

◇司会及び説明のため出席した者の職、氏名

教育部長 鳴海 誠、教育総務課長 中村 工

◇その他出席した者の職、氏名

教育委員会理事 奈良岡 淳、学校整備課長 三上 善仁、学務健康課長 菅野 洋、
学校指導課長 横山 晴彦、教育センター所長 三上 文章、生涯学習課長 柳田 尚美
博物館長 成田 正彦、文化財課長 小山内 一仁
企画課長補佐 白戸 麻紀子、文化スポーツ課 村田 善彦、
子ども家庭課長補佐 間山 博樹、農政課総括主幹 小野 孔明、
商工労政課主幹 澁谷 卓

午後3時40分 開会

○市長（櫻田宏）

令和元年度 弘前市総合教育会議の開催にあたり、ご挨拶を申し上げます。

本会議は、市長と教育委員会が、教育の課題やあるべき姿を共有し、連携を強化しながら、教育行政の推進を図る事を目的に開催するものであります。

人口減少と少子高齢化が進む中で、時代の変化に柔軟かつ的確に対応し、弘前市が持続的に発展していくためには、地域を担う人材を育て、将来にわたり活力ある地域づくりを進める必要があります。

そこで、「弘前市まちづくり基本条例」の理念のもと、市民生活を第一に、市民の「くらし」を支え、市民の「いのち」を大切に、次の時代を託す「ひと」を育てる、この三本の柱を横軸に据えて、市民が主体となった、市民との協働によるまちづくりの推進に取り組むため、本年三月に「弘前市総合計画」を策定いたしました。

本日は、本計画をもとに教育行政の方向性を共有しながら、教育委員の皆様と弘前市の教育政策について、意見を交わしてまいりたいと考えております。

限られた時間ではありますが、実りの多い議論となりますよう、ご協力をお願い申し上げます、挨拶といたします。

○市長（櫻田宏）

それでは、協議に入りたいと思います。確認事項は、『「弘前市総合計画」における分野別政策「①学び」について』であります。

まずは、事務局から説明をお願いします。

○教育総務課長（中村工）

それでは私からご説明させていただきます。

本日の令和元年度弘前市総合教育会議についてご説明いたします。

この総合教育会議でございますが、市長と教育委員会が教育行政の重点的に講ずべき施策等について協議・調整を行う場でありまして、両者が教育政策の方向性を共有し、一致して執行にあたる事を目的に、その方向性が明確になるものであります。

それでは、本会議でのテーマ等についてご説明申し上げます。

弘前市では、人口減少と少子高齢化が進む中であっても、「あずましい」まちづくりを進めるため、「ひと」づくりは必要不可欠であるとしております。

本年3月に策定されました「弘前市総合計画」の「リーディングプロジェクト」「地域を担うひとづくり」においても、「学校と地域が協働して、それぞれの得意分野を生かし、学校教育のみならず、地域の力で子どもたちが育ち、子どもと親と一緒に育つとともに地域を担う人材を育成する必要がある」としております。

本日は、分野別政策の「学び」につきまして、基本的な方針や方向性等を確認し合う事を目的といたしまして、教育委員の皆様にご意見をいただきたいと思っております。

それではお手元にお配りしております資料「弘前市総合計画＜一部抜粋＞」をご覧くださいと思います。

こちらは分野別政策「①学び」等を抜粋したものでございます。

50ページ目からの「政策①学び」こちらでは、弘前全体がまるごと「学びのまち」になり、「親と子が共に育つ」事で、地域を担う次の時代を託す「ひと」を育て、将来にわたって活力ある地域づくりを進めていく事を目指して、3つの「政策の方向性」、12の「施策」、61の「計画事業」により体系化しております。

一つ目の政策の方向性「地域を担う人材の育成」は、50ページから53ページにかけて、地域活動の担い手となる人材が育成されている事を「目指す姿」とし、「地域等の教育活

動への参加状況」、「子どもの笑顔を広げる市民運動」、「健やかな体の育成」、「学力の向上と時代に対応する教育」、「地域活動の状況」、「将来の夢や目標を持っている小中学生の割合」と6つの「現状と課題」を記しております。

また、54ページから59ページにかけては、「目指す姿」に至るまでの6つの「施策」と30の「計画事業」を記しております。

次に、60ページ目の二つ目の政策の方向性「生涯学習体制の推進」では、地域コミュニティが活性化され、情報拠点が活用されている事を「目指す姿」として、「生涯学習活動の状況」を「現状と課題」に掲げ、記しております。

次に、62ページ・63ページでございますが、こちらには、「目指す姿」に至るまでの2つの「施策」と10の「計画事業」を記しております。

最後に、64ページから66ページにかけては、三つ目の政策の方向性「教育環境の充実」では、共生社会の実現に向けた取組が推進され、子どもたちの学びと育ちの環境が整備されている事を「目指す姿」として、「共生社会の実現に向けた教育環境の状況」、「就学等の支援の状況」、「学校施設環境の状況」の3つの「現状と課題」を記しております。

68ページから71ページにかけては、「目指す姿」に至るまでの4つの「施策」と21の「計画事業」を記しております。

資料の説明については、以上となります。

なお、本日の会議は公開会議としており、時間はおおむね1時間程度を予定しております。

それでは、櫻田市長と教育委員の皆様が、本市の教育政策に係る目標につきまして基本的な方針と方向性を共有していく事を目的といたしまして意見交換されますことをよろしく願います。

○市長（櫻田宏）

ただいまの事務局の説明を受け、皆さんからのご意見をお伺いしたいと思います。

人口減少と少子高齢化が進む中で、弘前市として「あずましい」まちづくりを進めるためにも、「ひと」づくりは必要不可欠であります。

分野別政策「①学び」にありますとおり、弘前全体が「学びのまち」となり、次の時代を託す「ひと」を育て、活力ある地域づくりを進めていく事が、ひいては弘前市民の「暮らし」を支えていく事につながるものと考えております。

教育委員会では、この政策に対して、3つの政策の方向性を示し、各種計画事業を展開しておりますが、この事について、忌憚のないご意見等をお願いしたいと思います。

私といたしましては、子どもたちが、将来、弘前市への就職や生活など、根付いてくれるために、地域を含めた環境づくりや学びの場において、今からできる事は何かという事をお話しできればと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○教育長（吉田健）

教育委員会の職務、役割としたひとづくりという事で、まずは子どもたちの将来をどのよう

に考えていくのかという事が、一番重要であると思います。

今年も、去年もそうですけれども、学校訪問をして色々な小学校・中学校を見てまいりました。その中で感じるのは、今、教育改革の流れという形で、今まではとにかく知識を詰め込めば良いという事から、今は、表現力であったり、読解力であったり、判断力であったりとかそういう新しい学力観に沿った、そういうふうな力が求められている。だから、教え込む授業ではなく、どちらかといえば、わかる授業とか、そういう形でいろんな教育機器を活用しながらやっているなという事が感じられました。

ただ、やはり学校教育だけでは十分とは言えないので、大きな教育改革の流れで、地域の力もどんどん活用しましょうという事で、弘前市はコミュニティスクールで地域の方にも協力していただいております、非常に成果がでてきているのかなと。

学校訪問をまわって行っても、いろいろその学校独自の地域性とかありますので、りんごの畑が近い所はりんごの勉強をするとか、お城の近くはお城の勉強をするとか、そういったものがありますので、義務教育だからと言って、皆画一という事ではなくて、それぞれ地域に合った学習を通して、もまれるという事がすごく進んでいるなど。それをこれから画一的にやるのではなくて、地域に合わせたものをどんどん取り入れてやっていってもらえれば良いのかなと感じております。

そういうような事で、地域とか学校以外の力を教育に活かして、子どもたちに教育の場を与えていければ良いのかなと感じております。

○市長(櫻田宏)

教育長からされた話で、実は、11月25日に三中の校長先生から依頼がありまして、道徳講話をしてくれという依頼があつて。

道徳と言われてもなかなか漠然としていたのですが、前向きなお話という事でしたので、三中1・2・3年生、三大小・文京小・大成小の6年生、大体500人くらいだったと思いますが、6年生から中3までとかなり幅が広い中で、どうしようかなという中で、感交劇場、ファッション甲子園、鍛冶屋さん等々の3分程のプロモーションビデオを見せながら話をつなぎながら、自分探し、宝物を探そうというテーマでちょっとやってみました。

そういう活動って実は、いろんな方、まちの人が来て、時折やっているということでした。

その中で、一方通行で話すのはどうもあれなので、マイクを持ったまま、会場を歩きながら、生徒さんと話をしながらやったのですが、生徒さんも初めての様子・感じで、会話しながら1時間過ごさせてもらった。

ちょっと油断していた所があつて、自分の小さい頃と比べて、今の子どもたちは、かなりレベルが上で非常に鋭い質問がどんどん飛んでくる。

終わって1週間くらいしたら感想文をいただけて、それを見ると弘前というまちの事を知らなかったという意見がかなりあつて、弘前ってこんな良いものがたくさんあつて、感交劇場とはそういう事だったのかといった話であったり、鍛冶屋さんがあるのを知らなかつたりとか、ファッション甲子園も知らなかったという子どもたちが居たり、知っていたけどまだ見た事がないとか、そういう場面づくりをどうやって行くのか、そういうまちで行われている事を地域

の大人と一緒に子どもたちと考えていく必要がある。

感想文を読むと非常に前向きな自分探しをしてみようというような意見がたくさん出てきて、是非皆さんも、今度、学校訪問プラスあの体験はなかなか面白かったので、是非一度行かれてみると面白いのかなと。

○市長(櫻田宏)

私も、今年、桔梗野小学校70周年で、先輩に語ってもらうという事で、15分くらいの所を少々オーバーして、22~23分話してみたら、聞く姿勢ができて、この事にまずびっくりした。

その後、学年があがってくると、6年生から中学校になると感想文もしっかりとした感想文になってきて、そういう事を考えていたの、気がついているの、みたいな所があった。

今、子どもたちが変わってきているという事が実感できた。

○教育長職務代理者(日景弥生)

教育委員となって約半年なので、まだ5人の中ではビギナーなのですが、学校訪問させていただいて、それぞれの学校は本当にいろんな意味で頑張っているなという事をよく見る事ができましたし、生徒や子どもたちが勉学に取り組んでいる姿を見る事ができて、とても貴重な経験をさせていただきました。給食も食べさせていただき、なかなか給食を食べるという経験はないものですから、そういう意味でも本当に貴重な経験でした。

でも、一方で気になったのが、実は教育ノートに書かせていただいた事なのですが、ある中学校に訪問させていただいた時に、体育の授業で男女が別々で、そして先生も別々に、男子生徒の方には男の先生、女子生徒の方には女の先生がついて、そして違う種目を練習していたんですね。

これというのは、とても私はめまいがする状況だったんです。つまり、もう1989年ですから、もう35年くらいですか、経ってますね、つまり性別によって違う教育課程は禁じられているのが、国連の女子差別撤廃条約です。これはやっぱりそこに抵触する可能性があると思って、その場でも校長先生に申し上げた所なのですが、おそらく変わってなく、そのままやっているのではないかと推測されます。

つまり、学校現場がそれで当たり前だという形で動いているので、外からそういうのがあっても、今までそういうふうに来てきたんだ、やって来て何の問題もなかったんだ、だからそのまま続けますというのがあるように思うんですね。

それで、更に教育ノートを書く時に教育委員会の方に混合名簿の採択率を伺いました。実はその前に、県庁の男女共同参画課にも連絡をして伺ったんですが、データを持っていないと。県の方では、で、市の方はどうかなと思って伺った所、小学校で約8%、中学校で0%という状況で、私は当然混合名簿でしょ、100%でしょと思っていたので、これもすごい衝撃的だったんです。

この男女共同参画に関わる事は、なかなか家庭では難しい、地域でも難しいんですね。だから、やっぱり学校現場で先生たちが率先してやっていかない限り、この今回の総合計画の一つ

のキーワードである共生、共に生きるという視点が十分ではないんじゃないかなというふうに思っています。

教育委員として拝見させていただいたのは、本当にごく一部ですから、それ以外にもいろいろあるかと思うんですけど、そういうのというのは、ご自身、先生方一人一人が視点をもっていない限り目に見えないと思うんです。ですから、学校現場ではプロの教員としてこういう視点を持つ事が必要なんだという事を何かの機会にですね、話しをする機会があれば、もし私でよろしかったら、お話しをさせていただきたいと思いますが、何かそのへんがせつかく弘前市の男女共同参画20周年なのに学校現場でのその状況は、少しこの後もっと改善する余地があるんじゃないかというふうに感じた所です。

感想ですみません。

○市長(櫻田宏)

ありがとうございます。

弘前市の男女共同参画の基本計画ができたのが今から20年前です。その時の男女共同参画の共同研究員として、私は市役所の男女共同参画の初代の担当主査として、日景先生の所へ毎週月曜日の午後お邪魔して一緒に勉強させていただきました。

その時に今のお話を聞いて、あれから20年経っているのですが、なかなか当時の問題・課題と言っていたものも、いろんな分野でなかなか進んでいないのが現状で、昨日、弘前大学の方で佐藤敬学長とディスカッションさせていただいております。

今のお話、やはり先生方の気持ち、思っている事が、意思統一されていかないとなかなか実現できないのかなと。総論賛成各論反対ではないですけど、実際は言っている事はわかりますと。でも、行動に移していたかどうかという所が問われてくるのかという事だと思います。

日景先生からも、やはり男女共同参画を弘前大学で作上げた時の、弘前市と一緒にやってから10年後に弘前大学の中に男女共同参画推進室ができています。10年かかって担当の室ができる。時間はかかって進んできていますけれども、これからは、もう少しスピード感があって対応できていっても良いのかなと。そのためには、今の子どもたちに義務教育課程の中でどうやってこれを伝えて行けるのかどうか。これは早く動かなければいけないのかなと感じております。

只今の日景先生のお話を受けて、何かございませんでしょうか。

○教育委員(澤田義彦)

男女というものは違うと思うんですよ。決して平等ではない。異質。例えば、医療現場では、男女がどういう風になっているかという、逆の方向に進んでいる事がいっぱいある。

例えば、医学部の学生が実習に来る、妊婦さん拒否する。女子の学生でないと。

内科の外来は、女性の先生でないと駄目なんですよ。病院によると女性外来だとか、そういうのに向いたりして、むしろ女性と男性を分けてやらなければ駄目な状況が結構出てきているんですよ。逆に、昔だと無視してやっちゃっていた。女性の意思を無視していたという、そういう側面が今表面化して気づくのかも知れないのです。

けれども、まるっきり同じふうにしてやるのではなく、同じ対応をするためには、何が足りないのか、そういう所をちゃんとサポートする、補って行ってやらないと、単純に男性と女性を一緒にすれば良いのかとかそんなもんじゃないと思うんです。むしろ医療現場では、今は女性に気を使っている。逆に同じようにしようとして、すごく気を使っている。いろんな事をしているのが現状です。だから、そのためのその分野って多分、それぞれに悩みがあって、これを解決しなければ駄目だとか、そういうのがあるんだと思います。だから、単純にこう一緒にすれば良いというものではないと私は感じています。

○市長（櫻田宏）

そうですね。その辺りの議論を20年前にだいぶやって。結局、性別で最初から決めつけるという事はしない、性別で男の人は子どもを産むという話ではなく、それぞれの特質・特性・個性を生かしていくという中に男女でない所にも個性というのがあるという話に今なっている。一人一人の人としての魅力という所にどれだけ着目できるかという所に今移行しているのかなと思っています。

高木さんは、それについては、どんな感じですか。男女の話ではなくてもいいですよ。一つの話題として視点として持てばいいという所だったので。

○教育委員（高木恵美子）

子どもたちの事を私の目線であり、ネットワークで感じる所は、とにかく、学校が楽しく笑顔で通える環境作りというのは、本当にそれを目指して行ってほしいとは思っていますが、それに子どもたちが笑顔で楽しく通うためには、やっぱり学校環境だったり先生だったり、地域も含めた関わりというものが大事だと思うのですが、今、ユーチューブだったり、携帯・iPadみたいなものを小学生からみんな持って、情報過多、いろんな情報がいっぱい小学生の時代からあるけれども、それはあくまでネットの中でのやり取り、だからこそ本当に体験というのが必要じゃないかなと。

もちろん、勉学も大事なんだけど、いろいろ頑張っていますけれども、本当にこの地域の歴史だけではなくてそういう企業だったり、先輩方も自分の学校の先輩の話聞く、話を聞くだけじゃなくて体験というものが、やっぱり弘前にいて自分もこういう事をやりたいという、体験があってからの実感っていうか、落とし込む所というのは、大きいような気がします。見るだけ、聞くだけじゃなくて、体験というのをぜひ重視して学校の中で取り入れていったらなあ、とは思いました。

○市長（櫻田宏）

私、何回も口を挟んで申し訳ないのですが、こないだ弘南鉄道の平賀駅に鉄道の車輪を削っているという情報があって、作業している現場を見に行っただけですね。

実際、車輪というのは、通常地方鉄道の車輪は、JRまたは大手民間鉄道に委託してその車輪を削ってもらっているんですよ。走れば走るほどいびつになっていくので、何回か削ると減っていくので新しいのをはめる、この作業すべて弘南鉄道さんが自前でやっているという話を

聞いたのですね。でも、現場を見たら、こういう大きいのだったら、ぐるぐる回って飛んで行っているようなイメージだったら、なんと削ったのは、ゆっくり回っているんですよ。これいつ高速回転するんだろうと思うんですけど、分厚い歯をあてがうと、ここからカンナ層のようなものがゆっくり出てくる。一周回って少しずらして、一周回って少しずらして、ゲージを当てて、これどうかなって、こっちをもうちょっと削ろうと。その作業している方が、普段は運転手をやっている。その技術を教えた方が社長さんらしくて、社長さんも昔運転手をやっていて、自分で自分の車両の車輪を削っている。削って削って、新しいものにする時は外して、焼きばめって言って、鉄の輪を熱く焼いてぎゅっとはめて、冷めてしまった所をまた削るという、これをそのままやってすごいなと思って色んな話をしていたわきに、三中の生徒さんが職場体験に来ていたんですよ。

彼ら、彼女らは、ブレーキシューの交換をしていました。ブレーキシューの太い針金で押さえているのをはおって、そこを断線機で切って、抜いて、シューを外して、ヤスリをかけて、新しいブレーキシュー取り付けるといふ。ずっと、その作業をしているらしいんだけど、楽しいって聞いたら、いやあ楽しい、こういうの好きだと。男子と女子生徒と3人いたのですけれども、みんなすごく生き生きとやっている姿を見ました。

こういうような今の体験、多分これも一つなんでしょう、地元で歴史を学ぶというのは、たくさんこれまでやってきているんですけど、地域の事を知るといふ事は、大人も知らない、先生も知らない、でも、子どもたちは行って、それにおもしろいと反応している。

この状況を私は、先ほど出てきたように、親と子が一緒に知る機会にする、先生方も一緒に知る機会を作れば、地域にもっと目が向くのかな、あれすごかったよねという話になっていくんじゃないかと。

今、お話を聞いて、それでフッと思い出したので、付け加えさせていただきました。

○教育委員（村谷要）

私もフッと思い出したのですけれども、中学校の頃、こっちの方の一带って、図工か何かで、工作か何かで、ブナコを必ず作っていたので、その作り方ってあの頃からもう覚えてるっていう。今、木の段ボールの教材化、中学校の技術の方で今導入の方を検討されて、来年度から導入するつもりであるという。

○教育長（吉田健）

こういうのをやりたいという学校が手を挙げてますよね、村谷委員のお口添えによって。

○教育委員（村谷要）

知財が、そういう知的財産、地域によってもっとたくさんあるので、世界の製法特許、全部押さえているっていうのは、実は私が知っているだけで青森店舗さん、ランバーテックの。これを持ってるっていうのは、そういうのを実際に地域で、もっと知っていくっていうのは、子どもたちに、先ほどの道徳の本の時も、木の段ボールの素材持っていて、千切って渡して、触ってもらってとかしたのですけれども、そういうのやっぱり興味を持って、木で段ボールなん

で、きっかけっていうんですかね、もっと知ってもらえる、まずは大人が、ほぼ大人もまだ知らないっていう世代があるので。

○教育長（吉田健）

各学校でいろいろ体験に使えるとか、そういうふうなものを持っているんですよ。

それは、みんな一緒にやるのではなくて、その学校でまずやるというか、学校の独自性で、全部が全部その電車の所に行ってもやれないと思うんだけど、そういうようなのをいろいろと選択できるようにやって、各学校というのは、結構工夫しているなというのはすごく感じるので、特色を出して、どんどんやっていけばいいのではないかなと。

どんどんそういうのに教育委員会としてお金かけて、やっぱり教育はお金かかるので、そういうふうなものにお金で支援していくという事もある意味必要なのかなと。

これから、やっぱり体験だとか、そういうふうな、ただ勉強するのではなくて、探究とかです、自分で考えて興味を持った事を、自分で研究するっていうものは、これは、やっぱり一番必要だと思うので、そういうふうな事をいろんな考えを持っている先生方、潜在的に力がある先生方が各学校にいっぱいいますので、そこら辺の所で、どんどん子どもたちに体験活動をやらしてもらおうように仕掛けていくという事が大事なのかなというふうには考えますけどね。

○教育委員（村谷要）

特にハブになる施設が現代美術館、4月11日オープンにあそこに教育っていう、展示と教育とコミュニティという柱が3つあるはずですので、教育の部分でそこでいろんな学校を介して、いろんなものが体験できるような場になってもらえたら嬉しいなと。

○教育委員（高木恵美子）

小学校の低学年からもういろいろ体験できないと。

○教育長（吉田健）

一つ二つであっても、いろんな所でもう転がっていますので、近くの所とか、今の美術館は、遠い学校だったらバスどうするとか、そういうふうな事を考えなければならないので、地域の中に、本当にそのようなものがあるの、その掘り起こしとかそういった所が、とにかくいろんな事を体験させて、そうすると、やっぱり興味を持てば強くなるし、大学に行ったとか、高校に行って大学になってまた弘前に戻ってくるとかっていうのが、どんどん街が好きな、弘前が好きな子どもが増えていくのではないかなと思います。

○教育委員（澤田美彦）

自分が住んでいる所が良い所、良い所っていうのは変だけれども。それを確認できるのは、やっぱり他を知るからなんですよ。

例えば、私は進学する時とか、弘前に居ようと思って、弘前で勉強した。その後、27、8の時にアメリカに2年間行ったのですけれど、行って別の事を経験して日本の良さが分かった

し、弘前の良さもわかったし、ますますこの津軽、弘前が好きになったと。

それは、やっぱり他の所を見て、自分の所との違いを体験して、初めて経験できた事だと思います。

だから、例えば何も知らないまっさらな小学生に何かを体験させても、それは初体験にしかすぎないから、別な物事の差別、違いとかそういうのが分からないんですよ。大人はいろんな経験をしてきているので違いが分かるから、これはすごいなとか、そういうの分かるんですけど、それを子どもに、ただ単に押し付けてやるっていうのは、子どもにとっては初めての体験なので、別に互いの違いが分からないという。

だから、それをどうやってその教育の場で、子どもたちに別の体験をさせて、弘前は違うんだという、そういうのを感じさせるか、それが大事だと思うんですよ。

そういう意味では、こういういろんな所で、そういう展示とかいろんな事をして、弘前はこうやって、他の所の人たちはこういうふうにしてやっていて、この人たちは、弘前よりもいいと思って生活しているんだよとか、そういう事で自分はどう考え、弘前はやっぱりいいなとか、そういうのをいろんな体験の仕方というか、それが必要だと思うんですよ。

多分、先生だと県外に、きっとそういう状況だと思います。やっぱり、東京でいろんな事を話していると、東北地方の人たちもまとまったりとか、仙台にいと弘前どうのこうのとか。結局戻ってくるんですよ。そのあたりは、やっぱり他の所を知ること、自分の良い所が分かるとか、単純に間違っただとしても、弘前はこうだよじゃなくて、対比して、こう文化も見分ける。そういうのは、私、必要だと思います。

あともう一つ、弘前市の人口構成なのですけど、弘前市を見ると、21、22が一番多いですね。その後、24、25の人が少ない。30歳くらいになるとまた同じくらい。つまり、高校卒業すると、かなりの人がいなくなるんだけど、大学の後、帰ってきて、人口構成をみると、今、高校生で1,750人くらいいる、中学生は1,500人、大学生があれなんだけれど、実は、高校生がかなり出ていっているんです。出て行ってるけれども、埋められて一見知らないように。大学終わって就職していく、その段階で、次の24歳25歳の人たちが帰ってきています。このあたりで、そういう人は、元々弘前にいる人たちが、その24歳25歳の中でどれくらいを占めているかという統計はあるのですか。

極端に言うと、もしかしたら、上の方の学力的に優れている人たちが、出て行ってしまっている可能性が。じゃあ、その人たちが弘前をどうやっていくか。実は、学力が劣るとか何とかってというのは、単純に私から言わせると、勉強していないだけ。頭がいいとか、頭が悪いとかそんなの関係なくて、きっかけが無くて、勉強していない人たちがいっぱいいるんです。弘前には。そういうのは、私は、看護学校の学校長をやっているのですけれども、その人たちを教育して、最後に優良賞をもらう人は誰か、ほとんどが社会人で、現役の高校生は少ない。それは、やっぱりきっかけというか、看護師になりたいという、子どもを抱えて、国家試験なんか落ちてられるか、そういう人は、すごい勉強するんです。

だから、現役で高校から来た人たちはしたっば見て、社会人が上位を占めている。要するに、勉強するきっかけが無くて育っている人たちが、いっぱいいるんです。

だから、一見、学力が優秀な人たちが出て行ったとしても、今いる人たちで、十分社会が成

り立つというのは、看護師の世界を見て分かる気がするんですよ。

でも、実際にそういう人は、どれくらいの人が出て行っているのかなというデータをちょっと知りたいなという所です。そのうえで、残った人たちはどうするかというのは、やっぱり、看護学校で教育していると、いかに基礎学力をつけて社会に送り出すか。通過率がどうのこうのとか、平均点がどうのとかってやっていますけれども。でも、下の方にもグンと押し上げていると、世の中全然違うと思うのですよね。

例えば、社会に出ててもパーセントって何かわからない人が実際にいるんですよ、パーセントって何かわからない人が、比率が何かわからない人がいる。でも、教えると、ああそうだったのかって、25、6になって納得して、やる人いっぱいいるんですよ。

ですから、今、通過率がどうのとか、そういうデータというのは、私は、ここよりも弘前の事を考えた方がいいと、日本全国を考えると、もしかしたら、上かもしれないんですけど、弘前では、私たちが暮らすのを考えた場合には、むしろ下の方の基礎学力をきちっとやって世の中に送り出した方が、いろんな面でいろんな事を考えてくれる、いろんな事をやってくれる、そういう大人が増えるのではないかなと思っています。それは何か、看護学校の学生を見ると、できる所を分かります。

弘大の看護学科、毎年何人か国家試験に落ちます。医療福祉大学、弘前学院大学6人も7人も不合格、でも、看護学校は、入る時の学力が一番下ですよ。でも、国家試験の合格率は1番です。それは、やっぱりやる気があって、きちっとやっている。

だから、小学生・中学生、特に、私立とかあの辺のものは、もっとこう持ち上げていくと、平均的にもずっといい、整っていけると私はいつも考えております。ですから、その辺りを、教育政策の方向性とも合致してなんとか進めてほしい。

○市長（櫻田宏）

実践していただいて、その中からまたいろんなものが見えてくるということで。

○教育長（吉田健）

先生がおっしゃったように、やっぱり学力の本当にやる気だとか、そういうふうな意欲だとか、これが一番ですね。だから、どちらかというところ、今までは、算数だとか、テストでいい点数取る子は、頭がいいとされていたけれども、実際、そういう子たちが本当に社会で役立っているかといわれれば、意外とそうでないという事に気付いてくると。

だから、やはり学校の中で、とにかく勉強するというよりは、いろんな体験をさせたり、外に向かって発表させたりとか、そういう事が大事になってきているという事だと思います。

○教育委員（澤田美彦）

実際に、人を相手に医療の話ばかりするんですよ。人を相手にする仕事っていうのは、やっぱり、算数・数学の成績がいいとか、何がいいとかではないんですよ。教育、先生たちのプロの前でこんな話をするのはちょっとあれですけども、いわゆる非認知スキル、認知スキルというのは、例えば、英語の点数だとか、数学の点数だとか、何点、何点という、いわゆる非

認知スキルというのは、プロの前でこんな話をするのはあれなんですけれども、例えば、やり遂げる力、例えば、子どもがブロックを積んでガシャンと壊さず、最後までやってできたねって、ここまでやれる力とか、友だちと一緒によくいろんな事をして続ける力、それから、やっぱり自立という自分を律する力、そういう力がある子どもが、将来、アメリカで何とか、1960年代に経済的に恵まれない子どもたちが、IQでいうと、平均100とか、80とかの子どもたちは、そういう非認知能力を育てるような保育をして、片方は、放置してたので。それでやると、非認知能力を育てるのをやった子どもたちが、2000年で40年経ってから統計取って見たら、年収、それから犯罪率がすべて非認知スキルを育てるようにした子どもが、ずっと高かった。決して数学ができるようになるとか、それではないんだ、世の中に出てからがそうだ。

やっぱり医療なんかでも、チーム医療とか、そういうふうなものを、ただ単に何ができるではなくて、さっき言った非認知能力が優れた人たちが集まって行ったらいい仕事ができる、そういうのが分かっていますので。そして基礎学力をじっくり育ててやって、そういうふうにするるとすごく良くなって、社会や世の中に影響していく。

○教育長（吉田健）

会社の人事課の課長さんなんかも、そういうふうな力が必要だという事、よく聞きますね。

○市長（櫻田宏）

いろんな組織だと、たぶんそうだと思うんですけど、そういう仕事をやり遂げる力を、市役所もそうかもしれない、面接でその力があるかどうかというのを確認させていただいて、判断しているというのもあると思うんですけども。

○教育長職務代理人（日景弥生）

感じた事なんですけれど、小学校の卅（まんじ）学でしたっけ、やっている学校が、皆さん、ほぼやっているんですね。それで、中でも岩木小学校ですよ、お山参詣のそういうのを校内にもいっぱい貼ってあってですね、私、実は、埼玉県の生まれなものですから、埼玉県って、47都道府県中、県への愛着心とか、好きとかいう事が最下位なんです。それで、そう言われてみると、と思ったのが、私も決して好きじゃないんですけども、帰属意識だったり愛着心みたいなものを、あんまり、家庭でも積極的なものもなかったし、学校等でもなくて、結果的にそれが自分の中に入り込んできて、別に、すごく嫌いなわけでもないんですが、少なくとも弘前のような愛着心は、生まれてこなかったなという感じがするんですね。

積極的にどの学校もやっているんですが、気になったのは、それをやる事で子どもたちの中に、やっぱり、そういう愛着心は生まれるものなんですかね。そういう検証みたいなものが何かあると、もっと積極的に先生たちもやろうと思うかもしれませんし、あるいは、もうちょっとこんなふうにモディファイする事で、もっと何かいいやり方があるんじゃないかみたいになるかなというふうに思っています。

愛着心とか帰属意識を育てる事は、大賛成なんですけど、ただやみくもにやるのではなく、何

かそこでもっと頑張れるようなデータみたいなのがあるといいのかなっていうふうに、心情面で終わらずに、もうちょっと何かほしい所だになっていうふうに思います。

○教育委員（澤田美彦）

多分、小学生にはその違いが分からないと思うんですね。お山参詣ってなんなのか、これやってるよっていうだけ。これが、それじゃあ青森ではどうなのかとかって、他の事を全然知らない小学生にとっては、ただのお山参詣にしか過ぎない可能性がありますよね。

だから、それがその時に教えられて、例えば、就職していった、その時に、すごく強くなると思うんですね。だから、違いが分かる段階はどこなのか、他もちょっと経験したら自分の所がどうだったとかっていうのがよく分かる。だから、自分の所だけをやっていると、それがよく理解できなくて、理解できない小学生・中学生がいっぱいいてやる気ない、参加しない子もきついていると思うんですね。でも、大人になるとやっぱりあれすごいよねとかってなって、懐かしくなって、出て行ったりとかそういうのがいいのかな。

○市長（櫻田宏）

その時に子どもだけでなく、学校で親御さんと話をすると、家庭に帰ると必ず親が突然熱くなるんですよ。子どもよりも親が熱くなる、子どもはそれで学校に行くってというような状態で、その経験ってというのが後からわかっていくんだと思います。

でも、その経験を積める環境にあるというのは、今ではないですけど、郷土意識ってというのは生まれたのかなと。

私たち、弘前のさくらまつりで、すごいって言うけれども、私は、市役所に勤める前までは、桜はすごいって全然思っていない。当たり前だと思って、それがどうしたのってのと同じような感じなんです。要するに、今日、満開で良かったですって、どうぞって、見せられて、えっ向こうが見えてますよっていう。

○教育委員（澤田美彦）

弘前の桜を見てる人が、満開を見てる人が上野公園だかどこだかの桜を見て、満開だっていっても向こうの空が見えるわけですから、えって。

○市長（櫻田宏）

これは、満開じゃないと。

○教育委員（澤田美彦）

その後、弘前の桜ってすごいなって、すごく感じるんですけども。

○市長（櫻田宏）

後からでもいいので、そういう気が付くっていう、自分で経験した事は、気が付くという経験を多く積んでいけるかどうかという事が、大事だなと思いました。

○教育委員（村谷要）

今、卍（まんじ）学で、本でホームページを作っていますけれども。それって過去の歴史的なこと。今、現在、未来を含めた卍（まんじ）学みたいなのを見せていけるようにできたら面白いなど。

○教育長（吉田健）

卍（まんじ）学は、テキストを勉強するって事ではないので。弘前に関係する事を、弘前独自の職業を体験するのも、卍（まんじ）学だろうし、津軽塗のとか、いろんなのがあって良いと思う。

○市長（櫻田宏）

今を知る機会をしていって。

○教育長（吉田健）

さっき、村谷委員がしゃべっていたブナコというのは、私三中で一応、やりましたけれども、なんかよく分からなかった。今は、フランスでどうのこうのとか照明とか、おおすごいなと思いますよね。

○教育委員（村谷要）

お茶碗見ても、どうやって作るのかイメージできない。作った所で、そういえば茶碗でやっていたよとか。

○教育長（吉田健）

紙やすりでやっていたなとかってね。

○教育委員（高木恵美子）

すごい体験ですよ。

○教育長（吉田健）

当たり前だから、やっぱり当時は分からなかった。自分でも卍（まんじ）学を小学校の頃にやったっていうのは、記憶はないですよ。なんだけれども、本当にねふたの時期になれば、必ず子ども会というのがあって、それで行って、お菓子もらってとか、そういうのが当たり前で、紙貼りとかっていうのは、最初は小さい時は、見るだけだけど大きくなったら貼らせてもらったりとかっていうのは、知らないうちに卍（まんじ）学をやっていたんだらうなっていう。

○教育長職務代理人（日景弥生）

卍（まんじ）学とは言ってなかったと思うんですよ。うちの子どもたちは小学生の時に、社会科の副読本を使っていましたよね。おそらくあれは、その原点になるような感じかなと思います。

ましたね。

○教育長（吉田健）

弘前の立派な物、作っていますよね。小教研とか、中教研で使っていましたね。すごい立派なのが出来ていますね、冊子が。

○教育委員（村谷要）

今その、現在・未来に向けたので、ちょっと仕掛けているのが、ファッション甲子園が今、来年20回大会なのですけれど、そこに向けて。20回やってきていると実業高校が全部出場しているので、そうすると市内の子どもたちが3年生になったら、実業高校を推す子が非常に増えていて、面接のときに、あなたこんな良い点数で弘高受かるのに、なんでうちに来たのって先生が聞くぐらい、ファッション甲子園に出たいから受験しに来ましたっていう子が出てきているので、非常に面白い動きがあっっている。

将来の夢コンクールという食産でやってますけれども、あれで最近非常に多いのは、将来の夢がファッションデザイナーになりたいという事が出てきていて、この流れの中で、今、高校生の大会ですけれども、裾野をもうちょっと広げたいという事で、中学校のデザイン画のコンクールを作るところまでいかななくても良いので、来年、テスト的にやって、まずは弘前市でやって全国に持っていけるか、応募できるかどうかをトライしたいと思っていましたので、どこかのタイミングで、校長会とかで説明させてもらえればと思っている。

○教育長（吉田健）

せっかく、弘前市がファッション甲子園をやっているのですから。

○市長（櫻田宏）

ファッション甲子園、すごくなっているんです、その話を海外ファッション、コンクールの。

○教育委員（村谷要）

今年19回ですね。海外ファッションブランド協会って、70社ほどあるんですけれども、シャネルから、エルメスから、ヴィトンからみたいな、そういうそうそうたる会社の日本の社長さんの会なんですけれども、そこの6名、会長がエルメスの有賀社長という方で、リシュモンとかクロエとか6名の方に来ていただいて。

なぜうちはこんないい大会に19回目に出会ったんだろう、なんでもっと早く出会えなかったんだろうっていうくらい感動していただいてですね、ファッション甲子園、ファッションデザイナーになるだけじゃなく、そういうのに取り組んだ事によって、それをここの中ではなく、違う分野に行ってもいいっていう、確かに違う分野に行く方が多いんですけれども、そういうものが、弘前で全国の高校生が集まってきて、切磋琢磨して、弘前の高校生が、今、中学生も興味をかなり示してきていて、そういうキャリアを目指すような、そういう動きが出てきているというのは、非常に面白いなと思います。

これって実は、ものすごいシティセールスにもなっている。全部高校の中ではですね、高校の関係で、ファッション甲子園出たいがためについてというのが、すごく動きが出てきているというお話を全国の校長会から、結構いただいておりまして、これを弘前で、実はもっと、中学生までのものがきっかけとして、デザイン画だけでも、コンクール、そういうようなのをしっかりやっていきながら、中学校、高校、専門学校、大学というような事で、それぞれの縫製工場も多いですし、その中で、子どもたちにも活躍できる場面作りというのは、ひとつできるのかなど。

是非、これから校長会等でいきたいと思っていましたので、よろしくお願いします。

○市長（櫻田宏）

そういうのもやられていたというのが言葉だけは覚えているけれど、実際どういう状況だというのは分からないので、話は聞いていたものの、市長になって、初めて大会の様子を最初から最後まで、見させてもらったんです。

○教育委員（村谷要）

2年連続、見ていただいて。今年は交流会に参加していただいたので。

○市長（櫻田宏）

交流会って、ご飯を食べる場なんですけれど、審査員の方が各学校の生徒さんに対して、一人一人講評していくんですよ。丁寧にやっていただいて、1時間ぐらいかけて、先生、審査員の4名。それぞれがやっているんですけれど、全部やるとやっぱり1時間以上かかっている。その姿を、日本のブランドの社長さん方が見てて、そのブランドの社長さん方が積極的にその輪に入って行って、あなたどこの高校、何の作品みたいな、これこうだったらよかったよ、すごいね、みたいな事をやっている、子どもたちの目の輝きが全然違うんですね。

これ、弘前で行われているのっていう、その状態だったのは、19回。来年20回目は、さらに世界ブランドの社長さん方が70社あるという事を。

○教育委員（村谷要）

あと2、30人来る予定で今。

○市長（櫻田宏）

ということは、この大会、20回大会はすごい事になるんですよ。

○教育委員（高木恵美子）

じゃあ、小学生でも、中学生でも。

○教育委員（村谷要）

今回、実業高校さんの体験入学の時に、中学校の方100人くらい来ていたんです。その

100人の方には、招待券を渡して、ほぼ来ていただいたんで、希望する方々は非常に多い。子どもたち、中学生が目指していると。

○市長（櫻田宏）

そういう何か見えてきたものっていうか、気付いたものとかっていうのを追い求めるという、そういうふう子どもたちが動いてきていると。

○教育委員（村谷要）

自分探しするきっかけ作りをしてあげるといふ所が、ものすごく良いのかなと思うので。そこから、いろんな体験をしながら、身になっていけば良い。

○教育長（吉田健）

意欲を持ってやる気を出せばどんどん伸びる。

○教育委員（高木恵美子）

一つ、学校訪問して思った事は、本当に配慮が必要なお子さんが、すごく各学校に増えていて、それにももちろん担任の先生含め周りの先生方、校長先生・教頭先生も一丸となって対応している様子もいっぱいいて、見せていただいていたので、先生達、大変だなというのと、そういう子たちに対する、やっぱりいろんな先生たちの労働だけじゃない、市としてでもいろんなサポートを。

あとは先生たちの教育って言ったらあれなんですけれど、配慮が必要な子たちに対するきちんとした学び、先生たちの学びも必要なんだな、そういう時代だなとか思っていました。

○教育長（吉田健）

今、ちょっと発達障がいとかに代表されるんですけど、やっぱり、特別支援が必要な子どもたちっていうのは、非常に目立ってきているので、その辺の対応を徹底的に、そういう子たちが一人いれば、クラスがめっちゃくちゃになるとかっていうのは、話はよく聞くのでね。

そういう子たちは、本当は悪い子じゃなくて、ちゃんとその子に対して適切な対応をすれば、すごく伸びる子なんですよね。だから、そういった事をやれば良い。

具体的には、例えば、そういう子たちは特別支援学級に入るほどではないんだけど、俗にグレーの子とかっていう言い方しますけれども、そういう子たちは、今、通級学級というような形で、小学校も今の所2校ですが、それから中学校も2校、2つ決めてやっていますけれども、それも、もうちょっとこう拠点を増やして、力入れていかなければならないのかなど。そういう困り感がある子っていうのは、学校で出てきて、意欲的に一生懸命やる子もいるけれども、そういった子も手を伸ばしていかないと。手を差し伸べていかないとならないのかなっていう気はしています。

今、研修とかっていう事もあったのですけれども、そういった事っていうのは、いろいろ保健委員会とかいろんな所で教育もあつたりして、教育やっているのですけれども、まだまだ、

やっぱり、合理的配慮とかっていうなので、その子に合った対応をしなければならないっていうふうになっているんですけども、それがどう対応していいかわからない先生が、未だに多いという現状があるという事が、やっぱり、高木委員だけじゃなく、私もすごく感じますので、その辺やらなければならない。

○教育委員（高木恵美子）

その子にばかり担任の先生とか、周りの先生が行くと、今度、普通の生徒たちもそっちばかり行って、クラスの中でもそういうのがあって、出てきたりもあるみたいなので、大変だとは思いますが。少子だからこそ、自分の子どもは守りたくなる保護者もやっぱりすごく多くて、みんなが笑顔で通えるように。

○教育長（吉田健）

そういった意味で、教育センターとか、いろいろ弘前の場合には、そういう機関が結構頑張っていて、そういうふうなものをしてきている。そこの所をもっと充実させていくような事は、これから必要なのかな。どちらかというところと他の、全国のやつを見ても、そんなにそれに力を入れているっていうのは、あんまり無いので、県内でもですね。だから、弘前は、インクルーシブ教育っていうのは、進んでいるという大きい流れがあるので、その中に、いろいろそういう手立てしていくっていうのは、弘前から発信できる、そういうふうな今、教育センターでも、今、スタッフがそろっているんで、やれるのかなっていう事は思いますね。

○教育委員（澤田美彦）

発達障がいの子どもたちは、やっぱり、数が増えてますよね。前に比べて、明らかに増えているし、そういう人たちを無視した社会というのは、もう成り立たない状況です。

高校卒業して弘大とかうちの方とか、もちろん発達障がいの子どもたちは、決して成績が悪いわけではない人もたくさんいるんですけど。でも、ある程度フィルターがかかる、フィルターがかかるんですよ、学校に入ると。フィルターかかって、極端な話、こういう段階で見ると身につかないかもしれない、現実にはたくさんいる。

さっきの話になるんですけど、看護学校の中でも40人の中に1人いると、やっぱり、看護師というのは、人とのやり取りの職業なので、実習の段階になると表面化してくるんですよ。勉強の段階だと普通の成績をちゃんと取るんだけど。それをどう教育していくかっていうのは、今の所、専門学校であれば教員の数が足りなくて、そういう人が1人いると、他の39人と同じくらいのエネルギーを先生が使わざるを得ないという現実があって、専門学校としてはちょっと難しいという話です。でも、そういう人が必ず入ってくるんです。

それは、高校からの調査書とかに書かないんです。欠席はゼロ、でも、実は保健室登校で他の人たちとは全然交わってできない。でも、欠席ではないから欠席はゼロ。でも、入ってくるとやっぱり人とのやり取りができなくて。やっぱり、ある程度職業は制限されますよね。

例えば、極端な話、何かを統計処理するとか、ある意味こだわりが強い子どもであれば、そういうものを一生懸命やるというようなので、やっぱり職業、こっちの方は良いのではないか

な。

でも、人を相手にする職業は、ちょっと無理だなとかそういうがあるので、そういうのに対して、中学校卒業・高校卒業する時にある程度やっぱり指導してやらないと、無駄な2年、無駄な3年を過ごすんですよね。結局、退学して別の高校に行くとか。

そういう面で、弘前はすごく小学校・中学校、一生懸命やっていて、他の市町村と比べて見れば、そういうのが進んでいる。その後どうなのかっていうのが、多分問題になると思うんです。それこそ、障がい教育とか、そっちの方に少し関連するかもしれない。そういうので引きこもりがどうか、8050がとか、そういうのにつながっていくと思うんです。そういうふうになる確率が高くなる。その辺を見捨てずにやっていかなければならない。

○教育長（吉田健）

特別支援が必要な子どもに対する対応っていうのは、外国人で、今、子どもたちも来るケースが、結構弘前にもあるので、そういった子たちへの対応っていうのも、ノウハウを生かせるという事で。

今度、これからやっぱり、外国から人が入ってくるという時代になってくるので、そういう子どもたちをどういうふうに育てるかっていう事が、やっぱり、これから真剣に考えていかなければならないという、現にもう、そういうふうな形で入ってきて、中学校を卒業する学年なんだけれども、支援しなければならぬ。高校に行かせるかとか、そういった所は、やっぱり支援してあげないと。ちゃんと、日本語をしゃべれるようになるかとかっていうのはあるので、ちゃんと弘前の人になってもらうためには、市として、教育委員会として、フォローする、支援する体制というのは、結構、弘前はできる体制にあるのかなという事は感じますね。

特別支援等も含めて、多様性という事なので、特別支援だけではなく、いろいろな形で、外国人の子も含めてとは思いますがね。

○市長（櫻田宏）

多様性を認めるという、人としての個性を見るという事ですね。

発達障がいの方が、昨日の講師をやっていた方が、渥美さんという方が自ら、自分は発達障がいだと、空気読まないで言っちゃう所があるっていう話をされていたんですけども。それが東レ経営研究所ですごい研究をどんどんやって、会社の方針ではなかったのを、会社の方針になるみたいな、すごい話されていたし。

権利っていうのは、県の部長さんも自ら、今の世の中であれば、私は発達障がいかもしれないという話もされるんですけども。だから、すごい仕事をされている方なんですよね。

多様性の中にそれを認める社会になっていくと、個人の能力というものが生かされていくのかなと。

○教育長（吉田健）

アインシュタインでもエジソンでも、すばらしい研究とか。可能性はものすごくあると思います。人との出会いとか、そういったもので劇的に変わっていく。

○市長（櫻田宏）

もう少し何かテーマはないでしょうか。キーワードでは、私配られている中に、健やかな体を育成する教育活動、学力の向上と時代に対応する教育の推進、生きる力を育む地域活動、感性を高め夢を広げる事業展開などのキーワードをいただいているんですけども。

○教育長（吉田健）

先程、ちょっと話が出た中で、地域、弘前を好きになってもらうというので卍（まんじ）学があって、それから、大学に行ったりして外に出ても、私もそうなんですけれども、戻ってきて弘前の良さを知るとか。やっぱり弘前がこれから伸びていくためには、いったん勉強するために外に出てもいいんですが、また戻ってくる子たちを大事にしなければならないと思うのですね。

そのためには、まず一つは、経済的な問題というものが、弘前の企業っていうのがちょっと限られているとかという。まだまだ高校生・大学生を全部養われるだけの企業が無いので、なんだけれども、こちらに戻ってくるというという事は、次は、奨学金という形ですよ。

でも、いろいろやれるのかなというふうな事で、弘前市の教育委員会が管轄している中で、奨学金というのは、ずっとやってきているんですけども、そこも見直ししなければならないなと。ある意味、弘前に戻ってきて、そういった子どもたちには、例えば、貸したお金は免除するとか、そういうふうな事とか、いろいろと給付型とか、今、ありますので。そういったいろいろ皆さんからアイデアをもらって、ちょっと奨学金というふうなものも、弘前に定着して勤めてもらうために、やっぱりちょっと手をかけていかなければならない問題かなと思いますね。

○市長（櫻田宏）

この間、誘致企業の懇談会の所に、学校の先生方も入って意見交換の中で、去年かな、あったのは。子どもたちが高校を卒業して東京に就職しました、ああよかったですね、その後、3年たったら、ちょっと夢破れて辞めて帰ってきたと。その時のデータが無いですよ。その状況が把握されていないという事が分かって、高校で、子どもたちが帰ってきたら、高校はそれを受け皿として、どうしたというふうな事には、あまりなっていないみたいなんですよね。

この時に、今のお話なんです。東京での3年間の経験を活かして、生まれ故郷で何かをするっていう事につなげられるかどうか、今は、帰ってきて実家の手伝いをするぐらいの形になっちゃうんですよ。そこで、よくぞ3年間のものを生かしてほしいという、そういう受け皿になる企業が出てこないかな。

技術力、ノウハウとかやっている仕事は、すごいんですけども、私たちは知らないという、子どもたちも知らないという。なんかそこを、帰ってくる人、それからすごく勉強ができる人で自分が将来こういう事をやりたいという、10年かけて修行に出る、東京から海外に行っているんなものを吸収してきた人が、いざ地元に戻ってきた時に、何するかっていう事も中々想定していなかったのではないかと。それも想定している、力を発揮できる場を作っていけない

かと。これは、地元の企業の方々も含めて、地域のいろんな活動をしている人たち含めての話になっていくと思うんですけども。これも皆さんとともに考えていきたい。

澤田先生も海外へ行かれて、修行を積んで帰ってこられているので。

○教育委員（澤田美彦）

向こうにいと、向こうの人の、こっちは、日本人は向こうに行くんだけど、大抵はこっちに籍を置いていくでしょう。でも、アメリカ人はそういうふうに思っていないですよ。帰ったらどうするのっていう、帰ったらどこで働くのって聞く。だから、その辺りは日本と全然違う。向こうは、そうやって仕事をしている間にも、次のものをどうやっていくかっていう事を考えながらやっていて、こっちから見ると、歯が浮くような自分の実践の推薦状を書いているんですよ。とても日本人は書けないので。でも、すごく私は、そこで学んだのは、ちょっと話が違うんですけど、学校に行って、学校の先生をやっていると分かる、みんな分かると思うんですけど、子どもたち、学生、生徒が思っている事柄を、うまく日本語で表せない人がいっぱいいる。日本人はおとなしいとか、津軽の人は無口だとかって言うけれど、その無口だっという理由のかなりが、自分の思いを日本語にして表現できないというのがあると思うんですよ。

だから、今、子どもがディベートがどうのとか色んなのをやったり、あるいは、高校は、今度は、論理国語か文学国語とかってやりますけれど、文学国語をなくする事は、私は絶対に反対なんですけれど。でも、論理国語は、津軽の人は論理国語っていうか、自分の思いをいかに日本語に乗せて人に伝えるか、それは、絶対してたかと思うんですよ。だから、中学校あたりでも口が良いとか、そういう意味ではなくて、自分の思いをいかに日本語にして人に伝えるかっていうトレーニングをぜひやってもらいたい。

私は、一人一人、看護学校なんかでそういうのをやるのをちょっと難しいので、生命倫理とかそういうのを担当しているんですけど、A4に書かせるんですよ、一人ずつ聞くわけにはいかないから書かせている。自分の思っている事を言葉に表しなさい。そういうふうな事を看護師教育の中でやっているんですけども。

やっぱり中学校、向こうは子どもの時から、今日何飲んだのとか、日本だと、今日ジュース飲みたいで、ミルク、牛乳を飲みなさいとかってお母さんやっちゃうけど、向こうは最初から、小さい時から、どれ飲むとか考えさせて、レストランに行くとき食べるの大変ですよ、肉をどうやるのか、自分の思いとか出させている。言葉の面でも、向こうの人たちは、自分の思いを言葉に乗せて人に伝えるというのはすごくうまい。

日本人もやっぱりこれからは、あうんの呼吸とか選択ではなくて、うまく言葉で、人にいかに自分の想いを伝えるか、そういう教育をして、先生たちをお願いしたい。

○教育長（吉田健）

今、いろんな学校教育をやっているんで、必ず感想文なり、ちょっと意見を書かせたりとかっていう学校がだいぶ増えてきているので、ちょっとそこら辺は、これから。

○教育委員（澤田美彦）

ニュースを見ると、子どもたちが来て、お祭りをやるという、何とかがきれいでしたとかってというのは、ワンパターンでのあれは、なんとなくやらせみたいな感じですね。あそこから、もうちょっと出て、自分の気持ちを出す、表せるような、そういう子になって欲しい。

○教育長（吉田健）

スタイルを決めておくというのは気になりますね、発表の仕方ってというのは。

○市長（櫻田宏）

サッカーの子どもが、昨日、全国大会に行くって表敬を持ってきたんですよ。それで話を、会話をするんですけど、子どもたちに私が言うのは、一流の選手は、テレビのインタビューでいい事言ってるよねって、短い時間で。あなたたちも、これからサッカー選手を目指すのであれば、しゃべりも大事だからねって、必ず言っていると。で、一人ずつ話させているんですけど、自分の気持ちをああいう場で、緊張するような場でさっと言えろという事が、すごく大事だなと。

○教育長（吉田健）

宇宙飛行士の訓練の中にそういうふうに話をするってというのは、プログラムにあるんだそうですね。だから、全世界にインタビューを受けた時に、宇宙飛行士はちゃんと喋る訓練を色々積んでいると。やっぱり、オリンピック選手とか、そういうような人たちも、ドキドキとかしないように、そういう訓練が今やられているんですね。

○市長（櫻田宏）

訓練ですよ。

○教育委員（澤田美彦）

トレーニングである程度、また、元々そういう人はいるんですけど、トレーニングである程度カバーできますから。

○教育長（吉田健）

メンタルトレーニングですよ。

○市長（櫻田宏）

だいぶ最近、そういう機会が多くなったので。自分で自分にプレッシャーがかかっているの。もっと的確にまとめていくと。

○教育長（吉田健）

ちょっと、最近気になっているのは、実はプールなんですよ。今エアコンとかが必要になっ

てきてたのがあって、日本のプールっていうのは青空に、屋根かかってないんですよ。今、熱中症とかがはやってきているから、結局、プールを外でやるとなると、かなり熱中症に気を付けなければならないというので、学校が触れてるのを見ると、ためらう場面がこれから出てくるのかなと。やはり、プールも今はあるけれども、老朽化してくる。その中で満足しなければならないのかなというのが、今、2年3年後の話じゃなくて、もうずっと先の事なんですけれど、そこら辺で何か、室内プールという形のものも、これから考えていかなければならないのかなと。計画的にじっくりと議論しながら。

○市長（櫻田宏）

室内プールで、夏だけの体育とかのプールの授業ではなくて、一年を通して、各学校がプログラムを組んで、いつもあるんだという形で。

○教育長（吉田健）

年がら年中。それから、私、今、ジムにも行っているんですけども、老人の方と言ってしまえばあれなんですけれども、同じくらいの年齢の方。健康にはすごく良くて、走るとか歩くより良いというふうに、トレーナーの方が言っていますけれどもね。

○市長（櫻田宏）

競技できるというよりも、まずそういう健康増進の。全身を使いますからね。

○教育長（吉田健）

健康増進とか生涯学習とか、それと、学校教育も絡めた社会体育施設というふうなもの、これからは新しく建物として、そういうふうなものも必要なのかも、施設として。

○市長（櫻田宏）

時間帯としてどこを使うかっていうので、世代によって違うんですよ。専用ではなくて、この時間帯は学校、この時間帯は地域の方、この時間は働いている方のみみたいな使い方をする。

○教育長（吉田健）

無駄なく使える、そういうふうなものを。

○市長（櫻田宏）

ハードの話も今出てきましたね。ちょっとだけではなくて。

○教育委員（澤田美彦）

プールというのは、お金がかかるんですよ。

例えば、オリンピックで黒人の選手がいないというのは、スケートだとか水泳だとかってなりますけれども。あれは、アメリカ国内の農民だとお金がないとできないんですよ、子どもた

ちは、プールに行くとかスケートをやるとか。だから、低所得者の黒人の子どもたちは入る余地がないんですよ。だから、水泳だとかフィギュアは、話が分からないんですよ。

要するに、プールをそうやってやるためには、お金がすごくかかるんですよ。人が誰か立って、必ずあるか見てないといけない。

○教育長（吉田健）

今あるプールは、だんだん古くなっちゃっているね。

○教育委員（村谷要）

学校のを無くしちゃって、どこかのジムのを時間を決めて借りるといような、そういうのも有りかと。

○教育委員（高木恵美子）

学校のプールに夏休みに通うのも楽しみだったけれども。

○教育長（吉田健）

長い10年ぐらいのスパンで考えていかなければ。

○市長（櫻田宏）

歩いて行ける距離、自転車で行ける距離になっていたんですけれども。

○教育長（吉田健）

第一市民プールとか、第二、第三とか。

○市長（櫻田宏）

これからの課題も、ソフト・ハード、いろいろ出ましたけれども。今日の1時間、今で15分でありました。

教育のいろんな分野を雑談的に話をしていただいたのですけれども、シナリオ通りいくと、結局、市役所の落とす所に落ちていて、会議シャンシャンで終わるんですね。

そうではなくて、自由に発言していただいたという事が一番大事だなと、それが子どもたちに対する思いなり、地域に対する形だったりとか、というふうにつながっていくと思います。

今日、出していただいたお話を、それを後ろに控えているメンバーがしっかりと受け止めて、これからの教育政策に課していくというふうに思っています。

今日、教育委員会だけではなくて、商工だったり文化、スポーツの方だったり、揃っていますので、合わせて情報共有して、これからの地域づくり、子どもたちがどう育っていくのか、子どもと親の一緒に育つ環境の整備につなげていければと思います。

今日は本当に貴重な時間をいただきまして、ありがとうございました。

お疲れ様でした。